



通学路にあるゆずの木。実習生の間では、レモンの木と呼ばれているようです。

12月に入りました。今年は例年に比べて、一段と寒さが厳しいように感じています。この時期は、教室に入っても、冬の三種の神器？マフラー、ニット帽、手袋をつけたままの実習生をよく目にします。特に東南アジアから来日したばかりの実習生に、よく見られるこの風景。「さ・む・い・・・。」気持ちは、痛いほど分かるのですが、この時期に来日した以上、「この寒さに1日も早く慣れることが大切」との思いから、心を鬼にして、屋内での防寒具の着用は、厚手の上着も含めて、控えるように、実習生の皆さんに呼び掛けています。今年も、残すところあと僅かとなりましたが、実習生の皆さんが、よりスムーズに技能実習を開始出来るように、「実践的な日本語教育」に取り組んでいきたいと思ひます。1年間大変お世話になりました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。

あじけんスコープ Vol.60

講師ファイル：関口 陽子

初めまして。私は、関口陽子と申します。きぼう国際外語学院で日本語を教えて8ヶ月が過ぎようとしています。アジアの国々から技能実習生として日本に来て、働きながら技術を学ぼうとしている若者に出会い、胸を打たれると共に、複雑な気持ちになります。それぞれの国の文化の違いに触れたり、残してきた家族への思いに触れたりすると、驚きや共感を覚え、私の視野の狭さも思い知らされます。

しかしながら、こんな私でも、未来に大きな夢を持つ彼らの熱意に応えてあげられるのなら、と思ひ日本語指導に励んでおります。

日本語指導でモットーとしていることは、「まず、あいさつが自然と出てくるようにすること」です。「ありがとうございます。どういたしまして。」「すみません。これでよろしいでしょうか。」「おさきにしつれいします。」など……。短い期間でも、日本で実習をする上で日本人の上司や同僚に可愛がられて、仲よく仕事をするために絶対必要だと考えるからです。あいさつは、コミュニケーションの第一歩であり、日本人の心とマナーを理解し受け入れてもらうための鍵となります。そして日本での生活を楽しく過ごして欲しいと願っています。また、実習現場で危険を予知したり、回避するための安全を確保する為のコミュニケーション能力を身に付けたりすることも大切だと感じています。私自身も、日本語指導の技術を更に磨き、レベルアップしていけるよう努力していきたいと思ひます。そして、彼らが実習期間を終えて帰国したら、習得した技術や日本語を使って母国の発展に活かしていけることを期待しています。



今月の実習生



今月の実習生は、アジ研ファッションリーダー？のベトナム人実習生 LE THI THACH THAO (タオ) さんです。朝のラジオ体操後、一際目立つお洒落な足元。彼女が履いていたのは、今年の秋冬のトレンドアイテム、ふかふかの「ファー」が付いた靴。そのユニークなデザインに、「かわいい靴だね。どこで買ったの？」と話しかけると、「ドン・キホーテで買いました！」とのこと。来日直後に、日本のファッション文化をすかさず取り入れる、新しい環境への順応性には、脱帽です。そんなタオさんですから、技能実習の現場でも、きっと日本人スタッフと、直ぐに打ち解けて、円滑な人間関係を築いていくことでしょう。

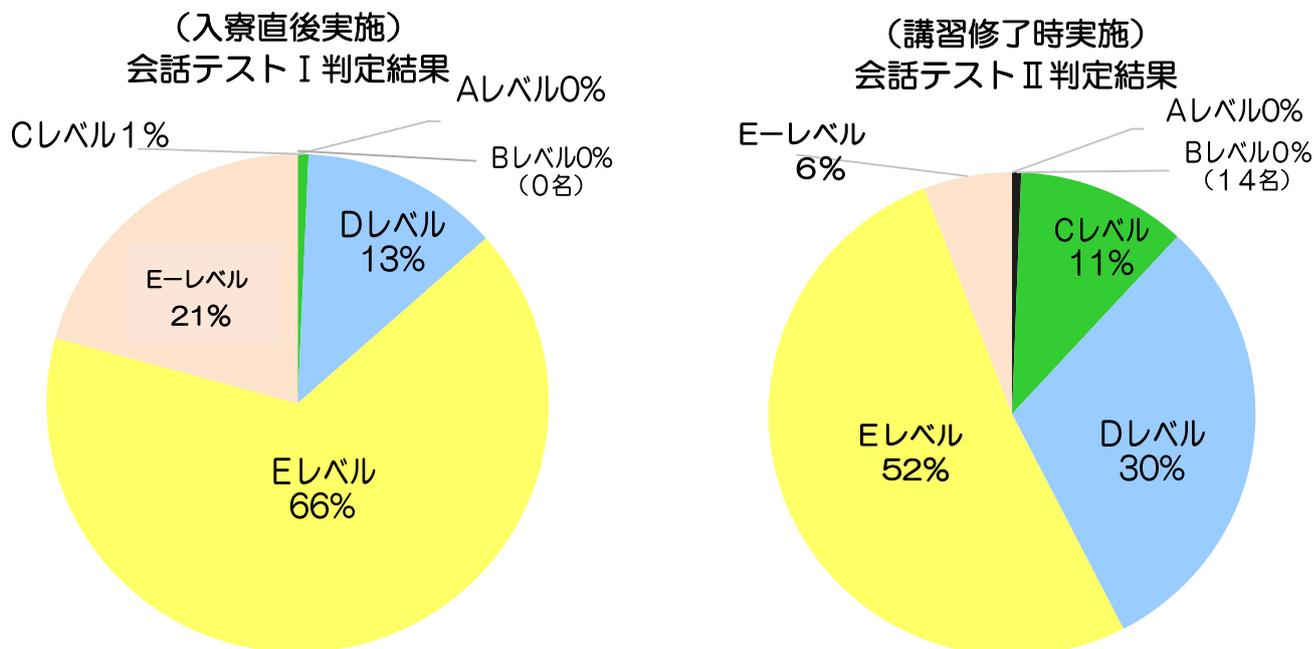


今年流行のファーが付いたファッションシューズ

にほんはとてもいいくにやあもります、でもたうと
とろろなところでもあそびにいきました。
ブラックフライデーにドンキホーテへいきました
かわいい靴を買ったので、かいました
そして40%セール あつちゅうれしかつたです
😊

あじけん流日本語授業

～2017年会話テストデータから見える日本語指導の成果と課題～



今月のあじけん流日本語指導は、今年1年間（1月～10月末まで）の実習生の皆さんの学習の成果を、会話テストのデータを基にご紹介したいと思います。

上のグラフから、講習開始時に実施した会話テスト I では、実習生の約9割（87%）が、Eレベル（ゆっくり話された基本的な内容の質問であれば何とか応じることが出来るレベル）、もしくはEレベルにも満たないE-（イー・マイナス）レベルの判定を受けていましたが、講習修了時の会話テスト II では、その割合が約6割（58%）にまで減り、代わりにDレベルとCレベルの割合がそれぞれ13%から30%に、1%から11%に増えています。このように講習開始時と修了時の会話力の比較では、実習生の皆さんの努力の成果がはっきりと表れています。

一方で、会話テスト II の結果だけを見ても、本校が技能実習を安全かつ円滑に行うために最低限必要と考えているDレベル（日常生活に必要なと思われる基本語彙が定着しており、基本的な内容の指示や質問であれば、自然な速度の日本語で問い掛けられても、スムーズに応じることができる聴解力、また、必要に応じて身の回りのことが説明出来たり、「聞き返し」や「確認」表現が出来る語彙の運用力があるとされるレベル）以上の日本語力を、講習期間内に身に付けられたのは、全体の4割程度なのが現状です。限られた講習期間内に、このDレベルの日本語力を身に付けるのは、容易なことではありませんが、来年も、妥協を許さず、1人でも多くの実習生の皆さんが、Dレベル以上の会話力を身に付け、技能実習がスタート出来ることを目指して、「技能実習生のための実践的な日本語コミュニケーション能力の育成」に取り組んでいきたいと思ひます。

※なお、来日前の日本語学習期間が1年～2年半と長期間のホテル実習生と、企業単独型の特別カリキュラムで講習を行なっている実習生のデータは、基礎データに含まれておりません。